

史料館報

第 48 号

昭和63年 4 月

公文書館法の成立によせて

～岩上二郎議員の趣旨説明を中心として～

所 理 喜 夫

(駒沢大学文学部教授)

周知のように「公文書館法案」の最終案は一九八七年二月七日にまとまり、八日の参議院内閣委員会(名尾良孝委員長―自民)の議決に基づいて、委員会提出法案として九日に参議院本会議に提出、衆議院に送付された後、十日の衆議院本会議において成立、同年二月五日法律第百十五号公文書館法として公布された(昭和六十二年十二月十五日【官法】号外一五五号)。

本法案草案についての趣旨は、十二月八日の参議員内閣委員会における岩上二郎議員の説明によれば「本案は、公文書等の歴史資料としての重要性にかんがみ、これを保存し、

広く国民の利用に供するための施設である公文書館に関し必要な事項を定めることを目的とするもので、その要旨は

「第一に、国及び地方公共団体は、歴史資料として重要な公文書等の保存及び利用に関し、適切な措置を講ずる責務を有することとしております。

第二に、公文書館は、歴史資料として重要な公文書等を保存し、閲覧に供するとともに、これに関連する調査研究を行うことを目的とする施設とし、国又は地方公共団体が設置するものとしております。

第三に、国は、地方公共団体に対し、公文書の設置に必要な資金の融

目 次

公文書館法の成立によせて	
～岩上二郎議員の趣旨説明を中心として～	
所 理 喜 夫……………(1)	
相州土屋村原家と定飛脚問屋	
藤村潤一郎……………(4)	
ロンドン大学の文書館学大学院に学んで	
安藤 正人……………(6)	

六二年度予算の追加配分について……………(9)
「近江国鏡村玉尾家永代帳」の刊行……………(10)
昭和六二年度新収史料紹介……………(11)
受贈図書……………(12)
集報……………(16)

通又はあつせんに努めるもの等としております」(同日参議院内閣委員会岩上議員説明書)

の三点につぎの。注意すべきはこの説明書に「なお、この際、草案の次の点について、念のため、申し添えさせていただきます」として次のような説明が付されている点である。

「まず第一に、第二条(定義)の『公文書館等』には、古文書その他私文書が含まれるものであること。

第二に、付則第二項の専門職員についての特例の規定は、現在、専門職員を養成する体制が整備されていないこと等により、その確保が容易でないために設けたものであること。

第三に本法は、既存の施設について、新たに、公文書館として位置付けし直すことを義務付けるものではないこと」(同上)。

本法案草案は無修整で参衆両院を通過した。当然のことながら岩上議員の参院内閣委員会における本法案草案についての趣旨説明の第一点は公文書館法の(目的)第一条に、

第二点は公文書館法案(定義)第二条、(責務)第三条、(公文書館)第四条・第五条に、

第三点は(資金の融通等)第六条に照応する。

岩上議員の草案趣旨説明の本文は、ほぼ公文書館法の趣旨そのものであるが、「なお、この際、草案の次の点について、念のため、申し添えさせていただきます」以下の三点の補足説明は、法の本文の語らぬ点、ないしは法の有効性とその限度を示す事からきわめて重要な意味を持つ。なお岩上二郎氏はかねてから全国歴史資料保存利用機関連絡協議会(以下「全史料協」と略す)他諸学会、

現・旧学術会議会員など有識者と連絡を取りながら、議員立法を目ざし、その政治的生命をかけられた方で、当時国会内では「ミスター公文書館」の綽名で敬愛されていたという。

その補足説明の第一点は、本法案の

第二条 この法律において「公文書等」とは、国又は地方公共団体が保管する公文書その他の記録（現用のものを除く。）をいう（引用は「官報」号外一五五号による―筆者注―以下同じ）

の「公文書等」には古文書その他私文書が含まれるというのである。「国又は地方公共団体が保管する公文書その他の記録」という定義からは公文書館が対象とする資料は近現代文書を中心とするかのようにも思われるが、むしろこの見解を否定する説明がある。

ところで（責務）の条項には

第三条 国及び地方公共団体は、歴史資料として重要な公文書等の保存及び利用に関し、適切な措置を講ずる責務を有する。

さらに（公文書館）の条項には

第四条 公文書館は、歴史資料として重要な公文書等を保存し、

閲覧に供するとともに、これに関連する調査研究を行うことを目的とする施設とする。

とある。立法府の見解によれば右の第三条、第四条における「公文書等」

にも内容として当然古文書その他私文書が含まれることになる。第二条の規制は受けるが、国及び地方公共団体は、歴史資料として重要な古文書その他私文書も含む公文書等の保存及び利用に関し、適切な措置を講ずる責務を有し、それ故に設置される公文書館は、それ等を保存し、閲覧に供するとともに、これに関連する調査研究を行なわねばならないこととなる。公文書館法における公文書館とは歴史資料保存利用機関であるとともに、「これに関連する調査研究」機関として規定されている。あり得べき公文書館とは、日本史学に関する歴史資料の保存利用と、それに関する学問的研究という二本の柱を基軸として構築されなければならない。

さらに問題は第四条にいう「これに関連する調査研究」の具体的内容である。

第一にそれは古文書その他私文書をも含む「公文書等」の学問的研究

であり、第二に公文書館の専門研究員である所のアーキヴィスト養成制度を支える新領域の学術的研究である。第一に関しては近現代史料の分類の研究が当面の課題となろう。公文書館が保管する「公文書等」とは、結果的には近現代史料が多くを占めると推測されるにもかかわらず、近現代史料の分類研究は少ないからである。そのさい近代に直結する近世史料の研究はきわめて重要である。近世古文書学の研究は今後なお深化させなければならないが近現代史料の分類研究は一日の長がある近世古文書学の成果を出発点として進められるべきであろう。第二点については、日本の学界ではほとんど未開拓の新学期の研究領域といっても過言ではあるまい。全史料協や諸学会、関係有識者の間でさえ、それがさきの歴史学の史料学を中核とされるべきとは言え、アーキヴィス養成のためどのような学問的体系を必要とするかについても共通認識は浅い。文書館学はようやくその研究が緒につきたしたと言うのが現状であろう。

岩上議員の補足説明の第二点は、本法案付則第二項に関してである。第四条第二項には

2 公文書館には、館長、歴史資料として重要な公文書等についての調査研究を行う専門職員その他必要な職員を置くものとする。

とある。このように重要な公文書等についての調査研究を行う専門職員を置くとしながら付則第二項には

2 当分の間、地方公共団体が設置する公文書館には第四条第二項の専門職員を置かないことができる。

としているのである。本条項において専門職員を置くとしながら付則において当分の間、置かないことができるとは、どういうことなのだろうか。付則であるから、本条項の規定が優先するのではあるが、わざと抜け穴を用意しているようなもので公文書法に対して、もつとも批判の多いところである。その批判を予測して、この特例は、現在日本には専門職員を養成する体制が整備されていないこと等により、その確保が容易でないためと説明されたのである。たしかに公文書法がようやく今日になって成立した日本では公文書館制度は未整備で、専門職員をどのような機関が養成するのかさえ決まっていない。しかしこの専門職員をい

ゆるアーキヴィストと同じであるとしてもアーキヴィスとしての公的資格があるかどうかということと実質的にその業務を果たせるかどうかは次の異なる問題である。「専門職員を養成する体制が整備されていないこと等により」とあるように、市町村の公文書館の場合を想定されたのであろうか。ただしこの付則第二項がなかったならば公文書館法はあるいは成立しなかったかも知れない。それがまた日本の文書保存運動が直面する現実でもある。

岩上議員の補足説明の第三点は既存の公文書館の歴史資料保存・利用機関と公文書館法との関連である。

日本の各地において、たとえ数十点でも史料を保有している施設を数えあげると一四八七を数えるけれどもそのほとんどは文書館という位置付けや運営がなされているとはいえない。公開利用の設備を整えているものは二〇前後であるという（安沢秀一『史料館・文書館学への道』吉川弘文館、一九八五年）。これらを一覧するに国立史料館、国立公文書館は独自の法律により設置され、地方公共団体の各機関はそれぞれ制定された条例を設置根拠としている。

条例にはそれを規制する親法がある。それは、ある機関では博物館法であったかも知れないし、図書館法であったかも知れない。それらの公文書館の歴史資料保存利用機関は言うまでもなく、歴史資料保存機関の独自性を相互に尊重すると言うことであろう。要は既設の文書館の機関と、これから公文書館法によって設置される公文書館を全国的な協議体のもとでネットワーク化し、その独自性を維持しつつ全国的文書館システムを構築することである（安藤正人・大藤修『資料保存と文書館学』吉川弘文館、一九八六年）。

以上、思いつくまま岩上二郎議員の参議院内閣委員会における趣旨説明を公文書館法と対比させながら、今回はじめて成立した公文書館法の問題点と今後の歴史資料保存運動の方向を模索してみた。浅井潤子氏よりの依頼を受け、安沢秀一氏や高野修氏等の御好意に得た史料を読み進むうち、とくに趣旨説明のうち補足説明の中に、公文書館法と、我々の歴史資料保存運動の矛盾が凝縮されていると感じたからである。

さて手もとに昭和六十二年九月四

日付け「参議院議員 岩上二郎氏」署名の次のような史料がある。

公文書館法案提案の趣旨

日本の公文書についての整理、調査、保存の実態は、諸外国と較べて著しく立ち遅れており、歴史的に重要な公文書その他の記録が破棄乃至散逸しつつある現状に鑑み、このまま放置することは歴史的国民的共通遺産を守る上からも許されないことであります。

この程 議員立法として、別紙のような成案を得、今国会に提出したいと存じます。

各党に於かれては、慎重御審議の上、速やかに共同提案に御賛同頂きますよう特段の御配慮を賜れば幸いであります（傍線は筆者）別紙法案草案はこれより三か月後、修正なく成立した。

ここで思い出されるのは、全史料協の全国大会同年十月二日の「文書館法をめぐって」のシンポジウムである。大方はまさに成立しようとする法案に賛意を表していた。印象的だったのは京都府立総合資料館の黒川直則氏が、館員すべてが反対であると明言されていたことである。

成立した法案に魂を入れるかどうかは本法については結局は関係する人の問題である。それにしても公文書法をめぐる史料保存運動の前途は多難というべきであろう。



相州土屋村原家と定飛脚問屋

藤村潤一郎

『史料館所蔵史料目録』第四七集「相模国大住郡土屋村原家文書（その一）」は、旗本窪田氏知行所名主原家の文書で、現在は神奈川県平塚市に属している。

土屋村から東海道大磯宿迄の距離は三里である（明治三年三月「村明細帳」、平塚市編集『平塚市史3資料編近世（2）』所収）。

原家文書には旗本窪田氏用人から知行所名主原家に宛てた多数の書状があり、大略年度別に一括されて保管されていた。

窪田氏の御屋鋪は江戸四ッ谷内藤新宿日影丁にある。また幕末期には窪田氏は將軍に從つて京坂に赴いているから、知行所名主は旗本の所在に從つて通信が必要であつた。

弘化四年の九月二〇日付、名主四郎兵衛宛の窪田主水内佐藤儀兵衛書状は、用人佐藤儀兵衛の退転跡役には中小性の者が採用され、新参者の予定のため「嶋屋、京屋之便ニ而御雑用等差送申候儀、当分見合可申旨被仰付候」とある。これは江戸の定

飛脚問屋嶋屋佐右衛門、京屋弥兵衛の便が利用されていた事を示している。

つぎに嘉永元年の五月二六日付、東海道大磯宿川崎伊三郎迄、相州土屋村池田屋四郎兵衛宛、江戸日本橋南二丁目藤木喜兵衛書状には、「江戸／日本橋呉服町／定飛脚屋／江戸屋仁三郎」の取扱印がある。池田屋は原家の屋号である。封中に縦一七・一センチ×横一二・〇センチの摺物が同封されている。内容は次の通りで、翻刻に際し文中にない句読点を補った。（以下同様である）

乍憚口演

一今般諸國爲便利、定飛脚渡世相始メ申候、東海道上方筋ハ勿論、諸國在々爲御登被遊候金銀荷物書状、其外不寄荷御品ニ御請負、御大切ニ取扱、猶諸國同店取次所江敷鋪申合、早着を專ニ相勵、屈方延引不仕候様可致候間、御返事御差出し被遊候筋ハ、私方江被仰付可被下候様、奉願上候、以上

江戸日本橋呉服町

定飛脚

江戸屋仁三郎

江戸屋の渡世はじめは、弘化三年であり（日本通運株式会社『社史』）、定飛脚屋とは諸問屋再興以前のためである。

弘化・嘉永頃に原家が大磯宿で書状、金子などを托したのは橋屋権左衛門である。原家文書の請取書によると、摺物に日付、請負品、賃錢、送り先、荷主名などを墨書している。使用印は「大磯宿／中橋屋／南本町」である。店標からすれば、江戸の定飛脚問屋嶋屋佐右衛門の取扱所だろう。摺物の内容は次の通りである。

都而御届ヶ物、万一相届キ不申候ニ付、御取調之儀者、三ヶ年限ニ御座候、右之年限過候而者、請取書諸帳面等取崩シ申候間、取調出来不申候、依之此段御断申上置候、以上

右之通、封印之俵儘ニ請取、無相違御届ヶ可申候、以上

大磯宿

橋屋権左衛門

これらの定飛脚は原家文書では、

町便、三度飛脚として記されている。文久元年の八月二一日付、相州土屋村名主長右衛門宛、窪田主水内柏木廣輔書状によると、この書状は飛脚長兵衛、小右衛門が運んでいるが、文中には「町便之儀、段々願之趣早速申上候処、先便も被仰付候通、已来相止候様被遊度思召之処、村方難渋之趣申立候ニ付而者、余儀無是迄之通、金子便ニ無之節ハ、御免相成申候、併先日之様成差掛り候御用向ハ相成不申候、十五日と廿日掛り而、宜キ御用向ハ可然候得共、差掛伺之儀等ハ町便御差留ニ相成申候、先々可成丈町便ハよろしからず儀と、心得被居様被仰付候」とあり、町便の利用は制限され、百姓による飛脚が歓迎されている。

慶応三年二月に一代窪田三十郎は遊撃隊仰付になり、一〇月に上洛し、翌年正月一九日に大坂から帰陣し、四月水府表仰付、七月帰府、九月駿河移住と動乱の内で、移動している。この間には慶応三年一月に大政奉還、翌年一月鳥羽、伏見の開戦、四月江戸開城、徳川慶喜の水戸への退去がある。窪田三十郎は將軍と共に行動している。

上洛の途中、慶応三年の一〇月晦日付、相州大住郡土屋村名主長右衛

門宛、遠州掛川宿窪田三十郎内柏木
栄助書状は本四日限で、取扱印は
「東海道掛川宿／定飛脚取次所／後
藤善太夫」である。

上洛後の一二月二五日付、御知行
所土屋村名主長右衛門・同黒岩村組
頭中宛、大坂下寺町窪田三十郎内柏
木栄助書状では、一月一日に京
都から用人書状で、御旅宿を通知し
たのに連絡がなく、殿様御立腹の旨
を記し、一二月一日に京地御旅宿
を引拂い大坂に入った事、家来が一
七日引拂の際に、京の旅宿に書状が
到着したら転送を依頼しており、大
坂の宿は下寺町大覚寺であるが、明
二六日に大坂天満組屋敷へ替るとあ
る。

ついで「扱此度は殿様一同実々一
戦相始可申候と御覚悟被遊、尤江戸
御出立之砌此度の御用は覚悟ニ上
京致候得共、一ト方不成心配致、先
当地江御供致候間、一ト先活延申候」
と緊張の内に安堵の胸の内を記し、
以下冷静に米相場を気にしている。

翌年の正月一三日付、大坂天満組
屋敷御旅宿ニ而窪田三十郎様御内柏
木栄助宛、相州大住郡土屋村名主長
右衛門書状は賃済で、早便を示す赤
紙がついているが、原家に残ってい
る。

内容は先ず一二月二八日付、長右
衛門書状があり、掛川宿からの用人
書状は一月一八日に延着して大磯
宿から到着した。これは江戸に持越
して大磯に戻ったからである。一一
月一二日出用人書状が同二八日に大
磯から到着し、京都御旅宿が判明し
たので、書状を「大磯宿橋屋権左衛
門と申飛脚屋へ、状賃京地迄百疋ニ
而一月晦日出し候処」とある。

江戸御屋簾には一二月一二日迄
は京から書状が到着していない。同
二四日立て江戸に赴いた飛脚から
「廿五日芝辺ニ而大さわきニ而、大
火の様子、飛脚承り候処、御屋敷
辺は静之御様子御安心可被成下候」
とある。書状の最初には「十一月八
日京都御着被遊、先々御同前ニ御目
出度奉存候、京地之御儀も静ニ而、
是又安心仕候」と天下泰平である。

この一二月二八日付書状の後に引
続き正月一三日付の書状が記されて
いるが、内容は正月六日に、一二月
二九日出の用人書状を請取ったと恐
縮し、「誠ニ此、書状間違之儀、大
磯飛脚屋相調候處、間違之儀有之間
敷趣ニ申居、能々相調候様申聞置候、
誠に御知行所ニ而も困入申候」と弁
じながらも、上納金、古米処理など
平常業務に頭を痛めている様子がわ

かる。

「江戸表の儀も当節の様子ニ而は、
静之様子ニ而安心仕候、江戸表之御
様子ニ而御沙汰次第、歩人差上可申
様、御屋敷より被仰付、先は右申上度
候共」と、泰平で、約三ヵ月後の江
戸開城などは文面からは予見できな
い。

書状が原家にある事は、結局戻っ
てきたのだろう。文中にみえる一二
月二八日付書状も届かず戻っている
のだろう。この通信の混乱について
の、大磯宿橋屋権左衛門の慶応四年
正月一五日付の弁明は次の通りであ
る。

以手紙奉申上候、餘寒甚敷候得共、
弥御勇健之段奉賀候、然者昨年中御
差立之京地行御状不着候ニ付、御調
被仰聞承知仕候、其後大晦日御差立
之御状も、多分相届不申哉とも奉存
候、其訳は最初御差立之時分、関東
方不残京都御引拂、大坂表へ俄ニ御
引越と申風聞、夫故京都町中も大騒
動と申風聞御座候、町人杯は其頃
所々逃去候様子も有之、然ル処当正
月三日、京都御詰之国司方と大坂
表之関東方と戦争ニ相成、伏見に淀
迄、何れも放火いたし大乱ニ相成、
旁飛脚通路も無之、何れも上之方、

関宿辺ニ逗留いたし候様子ニ御座候
間、右ニ付此度の御状受取候而も、
万一相届キ不申様相成候而は、猶々
御氣之毒様ニ付、何れ上方模様承り、
飛脚通路出来候様ニ相成候ハ、早速
可申上候間、夫迄御扣可被下候、昨
年中御差立之御状、何れ間違ニ而相
届不申哉、取調可申上候心得ニ候得
共、前文之次第、上方大乱ニ而、実
々困入候間、其内取調否可申上候間、
左様御承引可被下候様、此段奉願上
候、先者右之段取急申上候、己上
正月十五日

土屋村 大磯宿

御名主長右衛門様 橋屋権左衛門

貴下

ロンドン大学の

文書館学大学院に学んで

安藤 正人

私は一九八六年六月末から一九八七年八月中旬までの一年あまり、ブリティッシュ・カウンシルの給費留学生として英国に滞在し、ロンドン大学の文書館学大学院（アーキビスト養成課程）で一大学院生として学ぶ機会を得た。以下は、その簡単な報告である。

英国では大学の新学年は九月末か十月の初頭に始まる。それよりも三ヶ月も早く渡英したのは、英語の勉強のためであった。ブリティッシュ・カウンシル（以下、ブリカン）からは一ヶ月だけ現地で英語研修を受けたが、一ヶ月くらいの研修ではとても大学院の授業についていくだけの語学力を身につける自信がなかった。で、勤め先とブリカンに頼み込んで、なんと三ヶ月間の研修を受けられるようにしてもらった。

最初はブリカンの指示で、単身で渡英し、語学研修を受けるロンドン大学キングス・カレッジの学生寮に入った。家族と一緒に日本語ばっ

かりしゃべって英語が上達しないというブリカンの親心であるが、これは一ヶ月後、無口な父親のどこに似たのか一分たりとも口を閉じていられない七歳の長女を頭とする三人の子供たち（と女房）がロンドンに持ちこんできた日本語の洪水によって、見事に実証されることになった。

キングス・カレッジの英語コースは、秋の新学期から英国の大学院に進む海外留学生を対象にした特別コースで、九時半から四時半くらいまで毎日みっちりしごかれた。学術論文の読み方書き方の訓練はもちろん模擬セミナーを開いて研究発表や討論の練習をしたり、ホンモノの大学教授による講義を聞いてノート取りのノウハウを勉強したり、まことに実践的であった。

が、結局あまり上達したという実感がないまま三ヶ月の語学研修を終え、それでも「満足すべき水準に達したと認める」というお墨付きをもって、十月からはいよいよ大学院での勉強が始まった。

文書館学大学院がおかれているのは、ロンドン大学ユニバシティ・カレッジのスクール・オブ・ライブラリー・アーカイブ・アンド・インフォメーション・スタディーズ（図書館・文書館・情報学院）。大学院だけのスクールで、一九一九年に英国初の図書館学校として創立された。文書館学課程は、文書館などで記録史料の収集、整理、目録記述などの業務に従事する専門職（アーキビスト）を養成するため、一九四九年に設置された。現在、英国にはほかにリバプール大学など四大学に同様の課程がある。

ロンドン大学の文書館学大学院は、一年間のコースとして、「文書館学ディプロマ」「文書館学修士」「海外文書館学修士」の三コースがおかれている。前二者は、主としてイギリス人学生を対象としたコースであるのに対し、最後のコースは主として英連邦諸国を中心とする海外からの留学生を対象にしている。私は文書館学課程始まって以来初の日本人留学生としてこの海外文書館学修士コースに在籍したが、同級生は私のほかに七人。ひとりを除いて、母国の国立文書館等の現職アーキビスト、あるいは元アーキビストであ

った。なお七人の級友の出身国は、ケニア、スワジランド、南アフリカ、英領モンセラ、トルコ、マレーシア、それにインドネシア。このうちインドネシア国立文書館からきたジョーコ氏とマレーシア国立文書館のラハニ女史とは年も近く、それに同じアジアだからかウマが合い、何かと一緒に行動した。ふたりとも、物価高のロンドンではとてもやっていけないと、家族を母国に残しての単身留学で、子連れ留学の私は、日本人はお金持ちだねとずいぶん羨ましがられた。

海外文書館学修士コースの講義とセミナーは、一部の中心科目を除き他コースとはまったく別に独自の時間割りで行われた。私が履修した科目は、左に掲げた七科目であったが、このうち他コースのイギリス人学生と一緒に講義を受けたのは「文書館管理論」「記録管理論」「文書館におけるコンピュータ利用」の三つだけである。

文書館管理論（一・二・三学期）

記録管理論（一・二学期）

文書記述法（一学期）

検索手段作成法（二・三学期）

海外行政史（一・三学期）

歴史資料・書誌資料調査法（一

Ⅰ三学期)

文書館におけるコンピュータ利用(Ⅰ・Ⅱ学期)

なお、ほかにも「企業史料論」と「史料保存科学」の二科目を、初め数回受講したが、難しすぎたりオーバーワークだったりで、途中であきらめざるをえなかった。

また、正規の科目以外にも多数の特別講義が行われた。ロンドン大学東洋アフリカ学研究所における五回にわたる「個人文書の整理管理論」、英国図書館インド省文書館における二回の「英領インド史および関係史料」、ハットフィールド・ポリテクニクにおける「マイクログフィルム撮影技術」についての一日集中講義、パブリック・レコード・オフィス(国立文書館)のアーキビストによる「政府機関文書の記録管理」についての五回の連続講義などである。

正規科目の講義およびゼミナールは通常、カレッジ内の教室でおこなわれたが、「文書館管理論」や「記録管理論」の科目では、正規の講義以外の時間にかんがりの数の文書館や記録センターなどの施設を見学した。その中には、パブリック・レコード・オフィス(以下、PRO)、国立サウンド・アーカイブ、内務省文書局、

BBC記録センター、英国教会文書館、オリベッティ、その他が含まれる。

「文書記述法」と「検索手段作成法」の二科目は、毎週金曜日にPROで行われ、ほとんど丸一日、同オフィスの所蔵する原史料を使って、実務的な指導を受けた。この二科目はたいへんしんどい科目であった。

とくに「検索手段作成法」では、筆記試験の代わりとして、PROが所蔵する各省庁の膨大な史料のうち、自分の国に関係のあるものについてできるだけ詳しいガイドを書け、という、まことに雄大なテーマを与えられたので、みんな六月の締め切りにはとうてい間に合わず、夏休みに入ってもPROで顔をあわせる日がつづいた。なにしろPROは、書架延長にして一三五キロメートルもの史料を所蔵しており、目録だけでも七七八センチの分厚いやつが何百冊とあるのだ。私の場合も、やっとできあがって提出したのは八月の帰国直前であった(かなりいいかげんしろものだった)。

「文書記述法」の方は、自分の国に関係する史料を五十ファイル選び、一ファイルあたり、A4判半ページ程度、十行程度、三〜四行程度、と

いう三通りの詳しさの目録記述練習を行うもので、私は主として第二次大戦後の在日英国連絡事務所(講和条約発効後は英国大使館)の記録ファイルを使った。

それから、コースの一部として、文書館において一〜二週間の実習を行うことが義務づけられているが、私の場合は、旧知の英国図書館インド省文書館(ロンドン)のファリントン氏が、同文書館で史料の修復技術を中心とした一週間の実習を準備してくれた。欧米流の裏打ちから機械ラミネーションまで一通りやらせてもらったが、失敗もないではなかったものの、最後にはビューティフル・ジョブ(お見事)！という評価をいただいて、面目をほどこした。

このインド省文書館修復部門には、ロンドンの美術工芸学校を卒業した松岡久美子さんという若い日本人女性がりべアラ(修復員)として働いており、何かと助けてもらった。

海外文書館学修士コースの通常の講義およびゼミナールは、一九八七年五月に終了し、六月の第二週に最終筆記試験が実施された。私が受験したのは、必修の「文書館管理論」「記録管理論」「海外行政史」「歴史資料・書誌資料調査法」の四科目。

イギリス人学生の受験科目が七・八科目であったのに比べると海外文書館学コースはかなり負担が軽くなっている。が、いずれも三時間の論述試験で、私にとってはぜんぜん楽ではなかった。

そのほか、ほとんどの科目では、学期中に、最終筆記試験に代わるものとして、あるいは最終筆記試験を補完するものとして、エッセイあるいはレポートが課せられた。私は、「イースト・サセックス州文書館年報の分析」(文書館管理論)、「史料管理と記録管理の関係」(記録管理論)、「一九四五〜五一年日本占領期の行政管理史」(海外行政史)など六編のエッセイ、レポートを提出した。

筆記試験とレポートはなんとかパスしたが、海外文書館学修士コースでは、六月の最終筆記試験終了後、七・九月の三か月を使って一万五千語の修士論文を執筆し、九月末までに提出しなければならないことになっている。テーマは、文書館学に関わるものであれば何でもよい。

私の場合、九月末までに提出することは、はじめから不可能とわかっていたので、一年間猶予をいただくことにした。テーマは文書館法制の

問題を予定しており、ロンドン滞在中でできるだけの努力をして基礎的な文献資料を収集した。世界各国の記録文化財の保護や文書館運営に関する法令を比較検討し、日本に適合的な法のありかたについて何らかの提言をしたいと考えている。昨年十二月に公文書館法が成立したけれども、今後の課題はいくらもあると思われるので、右のテーマをかえる必要はないと考えている。

私の修士論文の指導教官は、非常勤講師（文書館におけるコンピュータ利用）担当のマイケル・ローバー氏である。ローバー氏はPRO副館長で、国際文書館評議会（ICA）の派遣使節として一九八六年八月に日本を訪問し、同年十二月に

Japan: Archival Development と

いう報告書を執筆している。世界各国の文書館事情に詳しいだけでなく、日本の史料保存利用体制の発展に深い関心を寄せているので、私の修士論文の指導教官として、これ以上の人物を期待することはできないと思っている。

さて、最後になってしまったが、私の留学の第一の目的は、英国をはじめとする文書館先進国の進んだ文書館学の理論と技法を学び、日本の

文書館システムの発展に役立てたいということであった。が、それだけなら、PROのような高レベルの史料保存利用機関に研修生として留学するという手もないではなかった。

私がそうせずユニバシティ・カレッジのコースを選んだのは、実はもうひとつ、将来日本に文書館専門職（アーキビスト）養成課程を設置することになった際、何らかの役にたてるよう、英国においてアーキビストの養成がどのように行われているか体験しておきたい、という第二の目的があったからである。

第一の目的についていえば、すぐれた講師陣と豊富な文献にめぐまれ私なりに大きな成果を得ることができたと思っている。

講師陣は、文書館学課程のチューターであるジョン・マクルウェイン氏をオーガナイザーに、主として、PROや民間企業の現職アーキビストを中心とする非常勤講師陣で構成されていた。これは文書館学が、極めて実務的な学問分野であり、専門職養成という現実的な任務を負っていることのあらわれであろう。おかげで、講義はおしなべてアップ・トゥ・デイトな内容であり、具体的にわかりやすい講義が多かった。おな

じことは、コース全体の学習プログラム構成においても言え、施設見学や実習がたいへん重視されていた。

海外文書館学修士コースの級友のほとんどが、それぞれの母国でアーキビストとしての経験をもつか、あるいは現にアーキビストとして活躍している人たちであったことも、学習のレベルを高めるうえで大きく幸いしたと思う。彼らは、それぞれ、母国の文書館システムを発展させるための、独自の、かつ具体的な課題をかかえて留学してきており、それだけに学習の目的は明確で、学習の姿勢も極めて熱心であった。彼ら級友との議論を通じて教えられたことは少なくない。

さて、第二の留學目的について言え、正規の大学院生として在籍し、イギリス人学生や他の留学生とともにフル・タイムのアーキビスト養成コースを一年間実際に体験したことについて、私なりの、意見とまでは言えないまでも、いくつかの感想を実感として持つことができた。言葉で言いあらわすのは難しいが、たとえば、アーキビストに必要な理論と実務を調和的に教えるためには、講義やセミナーや実習や施設見学をどの

ように組み合わせれば効果的かということや、現職アーキビストの非常勤講師がアーキビスト養成プログラムの中で果たしうる役割は、きわめて重要だということ、それに、現代のアーキビストが歴史学や古文書学から最新の情報科学まで今まで以上に幅広い知識と技能を必要とするようになっていくことを考える時、わずか一年の訓練期間では少し短すぎ、詰め込み教育になってしまうおそれがあるのではないかと、などである。このような実感は、文献を読んだだけでは得られないものであり、今回の留學の最大の収穫だったといえるかもしれない。

最後に、ブリティッシュ・カウシルの東京オフィスとロンドン本部の方々から受けた数々のご好意について、私は感激のほかなかったことをぜひ付け加えておきたい。留学生活は平穏で楽しかったけれど、実はひとつだけやっかいなトラブルに巻き込まれた（テレビ受信料のことで裁判所から召喚状が舞いこんだのです）。このときもブリカンの担当者、親代わりになって奔走し、助けてくれた。ブリカンのおかげで私がすっかり英国びいきになってしまったことは確かである。

六二年度予算の追加配分について

史料館が、かねて予算化を要望していた諸経費のうち次の二件について、昨年一月中旬に昭和六二年度予算の追加配分を受けただけ、各事業の概要を簡単に報告します。

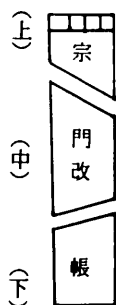
(1) 史料復元補修費

「高島藩領村々宗門改帳」は昭和三〇・三二年度に分割購入した史料で、数年前から復元補修を要求していたものである。この文書群は、領下各村から提出されて高島藩の藩庁記録として保管されてきたものを、明治維新後に民間に払下げたもののうち約四〇村分の四千冊位と推定される。この宗門帳は横長帳であるが、払下げの際に、そのほとんどが二・六片に断裁しており、村名や年次はもちろん冊数の確認も容易でなく、そのままでは閲覧利用に供せない状態であった。

一体この処分は、旧藩時代の特異な事情から村民の小川津右衛門が藩庫の宗門帳をひそかに分析したことに端を発したと伝えられ、断裁は一種の証拠隠滅を感じさせる。維新後に払下げを受けた右の小川津右衛門とその子息は、無秩序に依詰めされた断裁史料を丹念に拾い集めて、村名と年代による集積を進めたという。払下げ当時の詳細な状態は不明だが、

人名と寺名しか記されていない断片をまとめた努力は想像を絶するものがある。その後、この史料を引継いだ五味栄氏の手から史料館が譲り受けたのであるが、その間に若干の史料が散発的に放出されたようであるが、村名などは明らかでない。

こうして、史料館が引継いだ時には、ほぼ各村別に束ねた状態になっていたが、断裁された状態には変わらなかった。仮に一冊を三分割してあれば(図参照)千冊で三千片となるから、復元するには逆に三千片を組合せて千冊に戻すのである。しかし、試みに調べてみると、(上)(中)(下)の各片が完全に保存されているとは限らず三千片の何割かは紛失しているし、照合を進めると、残っている各片にも欠丁が多い。(中)(下)の部分の表紙側と終丁側に欠失が多いのは当然だが中心部の一丁だけが抜けている例も



珍しくない。綴じ目のある(上)は欠丁をおこしにくいはずだが、ここでも表紙や中途部分に欠丁がある。

従って復元作業は、切られた史料を継ぎ合わせる補修作業の前に、一冊ごとに編序を正し欠丁の有無を調査する原形確認作業が必要である。これを経常事業のなかで消化するには、作業量や手順などからみて実効を挙げ難いので予算要求していた。

今回の配分予算は、作業の試験的経費の意味もあったが、延べ四百人余の学生アルバイトを導入して原形確認と補修との両工程を実施した。このうち補修までを完了した史料は準備ができ次第、順次公開していくが、実に切断から一二〇年ぶりの復元となるわけである。ただし、補修が完了したのは全体の一部であるから、利用希望者は村名などを事前に確認した上でご来館下さい。

(2) 所蔵錦絵複製作成費

史料館が龍門社から寄贈を受けて所蔵している「日本実業史博物館旧蔵資料」の中に約七百点の錦絵類が含まれているが、産業や技術を主題にした錦絵コレクションとして特色があり、視覚資料への関心の強さとともに利用度が高い。描かれた対象や図柄のおもしろいものに利用が集

中するのはやむを得ないが、図版用の撮影申請が一年間に数回に及ぶものがあって、開披や照明のために史料が損傷することが以前から問題になっていた。このため、撮影フィルムを回収して、次の希望者にそれを貸与する方法が提案されたこともあるが、フィルムの大きさも区々であり、法律的に適法だとしても史料館の貸与フィルムとするには疑問が残る。やはり根本的な解決策としては予め史料館が自主的に写真撮影しておき、そのフィルムを貸出す方が望ましく、これによって史料の損傷回避を計画したものである。

この方法は、すでに所蔵の「鯨絵巻」で実施済みであるが、貸出用のフィルムに変色が目立つので、今回は専門研究者の助言を仰いで使用フィルムを選定し、三枚続き以上の錦絵には大形フィルムを併用するなどの工夫を加え、利用者の要望に応じ得るように配慮したつもりである。恐らく今年四月以後は、複製フィルムを作成した分の図版利用はフィルム貸与の方式となり、申請者による撮影は原則として承認されなくなろう。史料保存のための措置とご理解下さるようお願いするものである。

『近江国 玉尾家永代帳』の刊行

鏡村

本年度は「史料館叢書10」として当館所蔵の近江国蒲生郡鏡村玉尾家文書（「史料館所蔵史料目録第二三集」に収録）のうち、「永代帳」（内表紙「永代私用留日記」）を翻刻刊行する。

玉尾家文書は滋賀県蒲生郡竜王町大字鏡玉尾藤左衛門家の原蔵にかかり、昭和三五年・同三六年の兩年度にわたって岐阜市の故紙回収業者を通して当館の所蔵に帰したものが大半を占め、その後昭和四四年度に名古屋・京都の古書店が入手した若干の同家文書群を購入したものから成っており、総点数は二四八一点。今回翻刻の「永代帳」は京都の古書店からの購入によるものである。

ところで当初故紙回収業者から搬入された玉尾家文書は、危く再生紙の原料となるべき運命にあった故もあって、保存状態は一見紙屑同然のものが多く、何やら米相場に関する帳面類が比較的纏ってあるのが、通常の村方文書とは類を異にする点に興味を惹かれたものの、脈絡のない文書群の整理には困惑したものであ

った。偶然属目し得た古書店の目録にその片われの存在を見付けた時、たいした期待もなく、ただ当館所蔵史料の片われの存在を放置すべきではないとの理由で購入したわけであったが、その中に含まれていたこの「永代帳」一冊の存在が、玉尾家文書の整理に強力な支柱を与えてくれたことは望外の幸わせであった。加えてその内容が単に玉尾家文書の理解を深める役割ばかりでなく、「富農」という限定づきではあるが、農民生活の実態を類例のない程活写されており、諸人必読の価値あるものと断言しても過言ではないと考える。すなわち本書は近江国湖東農村で農業経営の傍ら、屋号を米屋と称し穀屋と魚肥商を兼営した富農「玉尾家」の当主が、寛延三年（二七五〇）から明治一二年（一八七九）まで五代一三〇年にわたって書継いだ年代記であり、全六三七丁に及ぶ。

玉尾家の居住する鏡村は近江商人の本拠地の一として著名な近江八幡の西南方、野洲郡境に接し、中山道武佐・守山両宿の中間に位置する街

道村である。往昔は京都と関東を結ぶ交通の要衝として知られ、鎌倉期の軍記物や史書に「鏡宿」として散見され、特に源義経が奥州の藤原氏を頼って東下りの際、鏡宿で元服した話は有名である。近世に至って元和六年入封の仁正寺藩市橋氏領（当初二万石、のち一万七千石）に属し村高は九五二石、田方が九割近くを占める主穀生産地帯である。玉尾家の初代は慶安元年に没しているが、元禄期の持高は一六石七斗余、享保八年約二九石九斗、そして「永代帳」の執筆が始められた五代当主の宝暦六年には四三石余となっており、当時の門閥的な村役人層を凌駕する高持になっていたと推測される。従って「永代帳」の前半での記事には領主からの御用金の強制に極力抵抗しては屈服させられる百姓身分の悲憤や、村払米の入札にかかわって村役人の専横に対する不満などが伝わってくるが、村内の未進農民に対する年貢の利付弁納・先納金の肩代わりなどを通して村経済の再生産に重要な位置を占めた玉尾家と、対村役人層・一般農民との微妙な軋轢の状態から、文化後年玉尾家庄屋役就任に至る経過の間に、俳諧や池ノ坊入門等を通して村役人層との交流を深め

仁正寺藩家老の忍びの遊山の饗応につとめるなど、対人関係に変化が認められ興味深い。

もっとも「永代帳」の執筆が家伝記録を意図したと思われるものの、時間的経過と共に同家が大津・大坂における米の相場取引にかかわっていた関係から、記事に変災・作物・物価等に関する広い範囲の地域の情報盛り込まれているのが一つの特色である。また諸寺社の開帳に関する情報やそれに伴う巡拝のこと、天皇の即位や葬送跡拝見・仏壇購入のための上京の記事等、当時の上方農民の関心の在り方や行動範囲などが伺われる。そのような外への活動の間、雨乞・神事など居村や組合村の行事・慣行にも熱心に参加し、また祭祀に伴う芸能関係にも詳しい記録を残している。

このように本書は村役人の御用留・日記類とはひと味違った素朴な民俗慣習・生活レベル・意識・信仰・娯楽・共同体の在り方等、近世の近江農民の実態と問題を提供し、極めて興味深いものとなっている。（鶴岡）

東京大学出版会発行

A5判 上製函入

四六六頁解題・索引共

定価 九、八〇〇円

昭和六二年度新収史料紹介

(F)はマイクロフィルムによる収集を示す。

(F) 越中国 島村折橋家文書

射水郡

折橋家文書の大半は昭和五八・五九年度にマイクロフィルムに収録したが(本紙42号参照)、その折、史料目録に掲げられながら所在の不明な史料が何点もあり、収録を見送らざるを得なかった。今回そのほとんどが発見されたのを機に、追加収録したものである。この間、何度も国元へ足を運ばれて探索を重ねられ、発見史料の詳細を通報して下さった折橋氏のご好意に改めて深甚の謝意を表する。

今回収録した中の主要なものについて記せば、文政八年の加賀越中能登の各郡下組分村名記、射水郡に関する「組々十村歴代」「村々家数調理帳」「十組村々五ヶ組合書上帳」「村々高家人数覚帳」など十村を勤めた折橋家にとって基本的な記録が約二〇種に及ぶ。また「高免帳」や「往還略絵図」「年中行事」のほか加賀藩の旧例故事を述べた「北藩秘鑑」一〇冊、歩刈改作などの「旧記留」をはじめとする編著書の写本も

書込みや伝本の少ないものを収録した。(現蔵者)折橋禮一氏。収録点数一〇四点、九リール、五五八九コマ)

(F) 信濃国 軽井沢宿 亀屋・佐藤家文書

亀屋・佐藤家文書はすでに昭和六〇年度に収集し、今回第二回目ではほとんどの文書の収集を完了した。同家文書の概要については、「史料館報」第四四号に紹介したので、ご参照願いたい。(現管理者)佐藤邦明氏、長野県軽井沢町九二五。収録点数一五八点、五リール、二七五六コマ)

(F) 信濃国 佐久郡 平原 小林家文書

平原村の小林家文書は軽井沢の亀屋・佐藤家文書のマイクロフィルム史料収集の際に収録したものである。同家文書は小諸市の大塚清人氏のご紹介によるものであり、同家文書は、まだ未整理であり、膨大なものであるが、全貌は明らかでない。しかし、慶安元年(一六四八)の

「平原村人御改帳」をはじめとして、いわゆる「宗門改帳」が、ほぼ全時代的に揃っている点が大きな特長であり、貴重なものである。今回は、慶安期・正徳四年(一七一四)までの「宗門改帳」等六〇点を収集した。(現蔵者)小林七左氏、小諸市平原一九七七。四リール、二七七九コマ)

(F) 肥後国 天草郡 本戸馬場村木山家文書

本文書は、天草郡本戸組の大庄屋文書で、一九八一年度、一九八四年度に次ぐ第三次収集として実施したものである。第一次収集分については本誌36号、第二次収集分については本誌42号の「新収史料紹介」をみられたい。なお、木山家の概要についても第36号の記事で紹介してあるので、そちらをみられたい。

今回撮影した史料は、すべて一紙文書である。一紙文書については前回の第二次収集から撮影を始めているが、膨大な量があるので、地元の研究者が作成された「木山家古文書目録」(稿)の記載順に撮影した。

今回収集分は、同目録の分類に従えば、「願書」(四〇点余、「出入」(三二点)、「内済」(一五五点)、「誤書」(八点)、「借用証」(三八

点)、「売買」(三二点)、「質地証文」(七点)、「書状」(九点)、「雑」(六点)のほか、未分類のもの約千二百点である。時代としては近世後期のものを中心に、明治・大正期に及んでいる。未分類のものは、賞、書状、証文類を中心にあらゆる種類に及ぶが、合足一揆関係史料などまとまった一件史料も含まれている。

一紙文書については、未撮影のものがなお千点以上残っており、近く第四次収集を予定している。(現蔵者)本渡市浜崎町一の一五 木山惟彦氏。収録点数七リール、四、〇二八コマ)

(F) 伊予国 宇和島藩士 鈴村家文書、鈴村譲旧蔵書籍

昭和六一年二月に旧宇和島藩士で明治一〇年政府転覆のクーデターを企てた鈴村讓関係の文書を御子孫の鈴村忠良氏より当館が寄託を受けたが(概要については館報四四号参照のこと)、その後、讓の生家に伝来した文書が福岡市御在の鈴村良明氏によって引き継がれていることが判明した。昭和六一年九月にその文書を調査したところ、讓が官憲に捕らえられたため、その弟の良一が家督を相続し、鈴村家代々の文書も

引き継ぎ、良一曾孫にあたられる良明氏のもとに伝来したものであることがわかった。一方、譲が明治以後個人的に作成・受領した文書の方はその孫の忠良氏（現在、埼玉県御在住）のもとに伝わったわけである。

鈴村家は代々宇和島藩の馬術・馬医を家業とした、知行百石・虎之間の上士である。藩政期の文書は各代の当主ごとに知行宛行状、由緒書（家督相続の際に藩に提出したもの）の下書・控、馬術・馬医免許状、用状などが区分けして袋に入れられて保管されているが、これは良一が整理したものらしい。これらが系図家譜などとともに長持に入れられて今日に伝わっている。このほか、良一自身が受け取った辞令書、書状（巻子仕立）、良一の日記も伝存している。また、譲は後年、宇和島叢書、上甲振洋関係資料の編纂に従事し、良一もそれを手伝った関係で、これについてもいくつか伝存している。書籍目録によると、書籍は良一と譲の子芝郎との間で分割したことが知られる。現在、宇和島私立図書館に鈴村譲の蔵書印のある書籍が所蔵されているが、これはおそらく後者が引き継いだ分であろう。

鈴村良明氏所蔵の文書・書籍も、

現在は宇和島市立図書館に寄託されている。今回、その主なものと、鈴村譲旧蔵書籍のうち上甲振洋の詩稿（譲が写す）、および譲の遺稿をマイクロフィルムに収めた。振洋は伊予の頼山陽と謳われた学者で譲の師である。譲の遺稿には松山獄幽囚中の記録やその時に詠んだ歌も含まれ興味深い。

㊦ 但馬国 仙石家文書

仙石家は、豊臣秀吉子飼いの武将であった仙石権兵衛（のち越前守）秀久に始まる大名家で、始め信州の小諸および上田にあったが、宝永三（一七〇六）年、仙石政明の時に出生に移封となり、以後明治の廃藩置県時までこの地にあった。

仙石家の分限高は、出石移封時は五万八千石であったが、天保六（一八三五）年に仙石騒動の故をもって三万石に減知となっている。

この仙石家出石藩には膨大な量の藩日記が残されている。藩主在邑の時には「御在城日記」、参勤在府の

時には「御留守日記」という表題をもっており、月毎に月番の年寄または中老が記述責任者として表紙に名前を記している。右の「日記」が文化一二年正月から明治二年一月まで六六四冊などが残されている。これらはもと、仙石氏の世系を祀る感応殿の神社に蔵せられ、旧藩士の人々の手で保存されてきたものであるが、現在は出石町立史料館に収められている。

今回のマイクロ収集では右の「日

受 贈 図 書

昭和六十二年度 (二)

記」のうち、文化一二年正月から文政一二年一二月までの分一八三冊と、その外に、「改撰仙石家譜」九冊、「士族人別帳」三冊など、計一九七点を収めた。なお、このマイクロ収集は、特別予算「近世史料の古文書学的研究」に基づくものである。複写のご許可を頂いた出石町教育委員会に厚く御礼を申し上げる。

（現蔵者）出石町立史料館、兵庫県出石郡出石町。収録点数一九リール、一〇八二六コマ）

伊勢崎市史民俗調査報告書 第5集
群馬県史 資料編2
新編埼玉県史 資料編18・20

秩父事件文獻総覧（埼玉県）
埼玉県史調査報告書 分限帳集成

鳩ヶ谷市の古文書 第十二集（鳩ヶ谷市文化財保護委員会）
鳩ヶ谷市の文化財 第十二集（同右）

千葉県史料 近代篇 明治初期七
千葉市史 史料編5
流山市史 近世資料編1

船橋市郷土資料図録 9（船橋市郷土資料館）
中央区年表 江戸時代篇下・昭和時代Ⅶ（中央区立京橋図書館）

都市紀要 32（東京都）

東京市史稿 市街篇第78・産業篇第31（同右）

牛五郎日記 第六冊（牛五郎日記研究会）
世田谷区神社台帳（世田谷区教育委員会）

口訳 家例年中行事（上町大場家）（同右）
世田谷区史料叢書 第二卷（同右）
豪徳寺文化財総合調査報告（同右）
月廻野露草双紙 上（昭島市教育委員会）

調布市史研究資料 VI・VII
赤坂氷川神社御用祭と氷川山車（港

〔区教育委員会〕

小田原市立図書館叢書 3

大和市議会史 資料編1・2

神奈川県民俗調査報告 15〔神奈川県立博物館〕

秦野の記念碑〔秦野市〕

秦野市史自然調査報告書 3

新潟県史 通史編2・3・6・別編

3 人物編

柏崎市史資料集 考古篇1

糸魚川市史資料集 2

〔富山県〕細入村史 上巻

福井県史 資料編6

武生市史 資料編 社寺の由緒

長野県史 近代史料編 第三巻(一)・

第八巻(一)

〔静岡県〕細江町史 資料編七

磐田市誌シリーズ 第8冊

沼津資料集成 14〔沼津市立駿河図

書館〕

新修稲沢市史 資料編十一

田原藩日記 第一・二巻〔田原町教

育委員会〕

三重県史 資料編 近代1

滋賀県議会史 第九巻

郷土室古文書叢書 三・四〔尾鷲市

立中央公民館郷土室〕

郷土むかしばなし〔同右〕

尾鷲のことば〔同右〕

草津市史のひろば

史料京都の歴史 第10巻〔京都市〕

大阪府史 第六巻

池田市史 史料編⑦

〔大阪府〕熊取の歴史

東大阪市史資料 第九集

藤井寺市文化財 第八号〔藤井寺市

史編さん室〕

相生市史 第六巻

加古川市史 第五巻

豊岡市史 下巻

明石市史資料 第四・六集・第六集

追録〔明石市教育委員会〕

〔和歌山県〕川辺町史 第三巻

岡山県史 第28巻

総社市史 考古資料編

呉市史 第五巻

古文書調査記録 第12集〔福山城博

物館友の会〕

岩国金石文集〔岩国徴古館〕

香川県史 第5・10巻

南国市史資料 旧村誌編(2)

福岡県史 近世史料編 福岡藩町方(一)

埋蔵文化財調査研究報告 1〔宮崎

県総合博物館〕

えびの市埋蔵文化財調査報告書 第

2集〔えびの市教育委員会〕

奄美史料 (17)〔鹿児島県立図書館奄

美分館〕

南日本文化研究所叢書 12

経済史文献解題 昭和61年版〔日本

経済史研究所経済史文献編集委員

会〕

類縁機関案内〔東京・神奈川・千葉・

埼玉〕1987年版〔相模女子大

学付属図書館〕

北海道開拓の村ガイド〔北海道開拓

記念館〕

佛光寺御日記 第一巻

当山記載新聞集 第四編〔岩瀧山往

生院六万寺寺史編纂委員会〕

三くだり半〔平凡社〕

C・W・ニコルの海洋記〔実業之日

本社〕

石炭研究資料叢書 No.8〔九州大学

石炭研究資料センター〕

郵政省通信博物館資料図録 別冊3

サントリー美術館開館廿五周年記念

論集 二号

日本の名碗 100〔同右〕

物語絵 TALES OF JAPAN

〔同右〕

ジャワ更紗〔同右〕

大久保利通・木戸孝允・伊藤博文特

別展〔憲政記念館〕

縄文の神秘 注口土器〔大田区立郷

土博物館〕

江戸の名僧 澤庵宗彭〔品川区立品

川歴史館〕

広重・名所江戸百景展〔足立区立郷

F・ベアト幕末日本写真集〔横浜開

港資料館〕

冷泉家の歴史と文化〔石川県立博物館

静岡の花火〔静岡市立登呂博物館〕

徳川美術館の名宝

泉南の文化財〔大阪市立博物館〕

染と型紙〔東北歴史資料館〕

わたしたちの生活と家具〔栃木県立

博物館〕

武蔵ゆかりの武器・武具〔埼玉県立

博物館〕

八王子城主北条氏照文書展〔埼玉県

立文書館〕

宇治市文化財調査報告 第一冊〔宇

治市教育委員会〕

路〔相川郷土博物館〕

播磨総社一つ山、三つ山〔兵庫県立

歴史博物館〕

絵図と街並みの移り変わり〔沼津市

歴史民俗資料館〕

特別展 菩薩〔奈良国立博物館〕

頂妙寺文書・京都十六山会合用書

類 一・二〔頂妙寺文書編纂会〕

教養の日本史〔東京大学出版会〕

江戸末期の三石アイヌにおける流動

的集団の形成メカニズム〔遠藤匡俊

岩手県大船渡市蛸の浦貝塚〔大船渡

市立博物館〕

能代市史資料 第17号

- 〔茨城県〕藤代町史 民家編
真岡市史 第六卷
春日部市史 第三卷
〔千葉県〕酒々井町史 通史編 上・下巻
立川市史資料集 第4・6集
東京都古文書集 第5巻〔東京都教育庁文化課〕
文化財の保護 第19号〔同右〕
大田区の文化財 第23集〔東京都大田区教育委員会〕
大田区の埋蔵文化財 第7集〔同右〕
〔新潟県〕中里村史 資料編 下巻
向日市埋蔵文化財調査報告書 第14・21集〔向日市教育委員会〕
写真でみる暮らしと風景〔精華町史編さん委員会〕
大田市史史料 第20輯
羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 14
〔羽曳野市教育委員会〕
宝塚市水道史〔宝塚市水道局〕
西紀・丹南町文化財調査報告 第5集〔西紀・丹南町教育委員会〕
兵庫県立歴史博物館総合調査報告書Ⅱ
愛媛県史 近世下・社会経済4・6・地誌Ⅱ・資料編幕末維新・同近代4・同社会経済下
都城島津家史料 第一巻〔都城市立図書館〕
- 天地有情〔宮本又次〕
追悼河岡武春先生〔神奈川大学日本常民文化研究所〕
桑名日記・柏崎日記の研究〔沢下春男〕
諸国叢書 第4輯〔成城大学民俗学研究所〕
山村生活5年その文化変化の研究〔同右〕
〔同右〕
近世後期における鉱山経営 中・下〔荻慎一郎〕
近世後期における金山の生産工程と住民構成〔同右〕
国土防衛史〔幕末〕〔防衛研究所戦史部〕
蒲生禮一先生記念論集〔蒲生禮一先生10回忌記念刊行会〕
彩色文化財の劣化と保存に関する実証的研究〔東京国立文化財研究所〕
近代丹後の黎明〔京都府立丹後郷土資料館〕
伊根浦の歴史と民俗〔同右〕
浮世絵に描かれた沼津〔沼津市明治史料館〕
明治・大正・昭和的生活資料展〔奈良県立民俗博物館〕
岩手の近代鍔金展図録〔岩手県立博物館〕
懸仏への祈り〔石川県立歴史博物館〕
平城宮木簡 四 図版・解説〔奈良
- 国立文化財研究所〕
函館市史 統計史料編
目で見る津軽の歴史〔弘前市立博物館〕
〔青森県〕浪岡町史資料編 第十七集
青森県立郷土館調査報告 第21集
仙台市文化財調査報告書 第78・83集〔仙台市教育委員会〕
郷土資料叢書 第十七輯〔山形県新庄市史編集資料集 第7号
〔福島県〕滝根町史資料集 第12・13集
滝根町史料叢書 第2・3集
新編埼玉県史 通史編1
〔埼玉県〕三芳町史 史料編Ⅱ・Ⅲ
我孫子市史資料集 古代・中世篇
日野市史 通史編三
中野の文化財 No.11〔中野文化センター郷土資料室〕
中里遺跡 1・2〔中里遺跡調査会〕
鎌倉市史 近世史料編第二
影印横浜文書〔横浜市教育委員会〕
世田谷区遺跡調査報告 7〔世田谷区教育委員会〕
大蔵―世田谷区民俗調査第7次報告
〔同右〕
下神明遺跡Ⅱ〔同右〕
殿竹遺跡予備調査報告書〔同右〕
- 鳥山南原遺跡〔同右〕
滝ヶ谷遺跡〔同右〕
砧中学校遺跡〔同右〕
根津山遺跡群〔同右〕
世田谷の近代建築 第1輯〔同右〕
〔新潟県〕川西町史 通史編 上・下巻
各務原市史 通史編 近世、近代、現代
〔愛知県〕刈谷町庄屋留帳 第十八巻〔刈谷市教育委員会〕
〔大阪府〕阪南町埋蔵文化財報告Ⅳ〔阪南町教育委員会〕
忠臣蔵 第三巻〔赤穂市市史編さん室〕
香川県史 13
熊本県歴史の道調査 菊地川水運・同資料編一〔熊本県教育委員会〕
串間市文化財調査報告書 第1集〔串間市教育委員会〕
貴族院職員懐旧談集〔霞会館〕
租税資料叢書 第二巻〔国税庁税務大学校租税資料室〕
統計資料シリーズ No.31・32〔一橋大学経済研究所日本経済統計文献センター〕
日本外交文書 大正十五年第二冊下巻〔外務省〕
泉南市史 通史編
札幌市中央図書館蔵書目録 第5巻

小樽商科大学経済研究所特殊文献目録 5

北海道立文書館所蔵公文書件名目録 2

北海道立文書館所蔵資料目録 2

北海道刊行政資料目録 第18号

〔北海道総務部文書課情報公開準備室〕

常設展示資料目録〔苫小牧市博物館〕

北海学園大学増加図書目録 第22号

札幌大学図書館所蔵雑誌目録 19

83年版 補遺4

北海道開拓記念館一括資料目録 第18・19集

北海学園大学欧文雑誌目録 198

6年8月現在

北海道立図書館蔵書目録 第19分冊

北海道開拓記念館収蔵資料分類目録 6・7

札幌大学図書館増加図書目録 第7巻

光輪山南部妙法寺什寶絵目録

岩手県立博物館収蔵資料目録 第1・2集

特殊文庫目録 第三冊〔宮城県図書館〕

東北歴史資料館資料集 17・18

仙台市民図書館郷土資料目録 16

秋田県立博物館収蔵資料目録―自然

II―

秋田県立秋田図書館所蔵〔秋田藩家

蔵文書〕対照索引

秋田県歴史資料目録 第二十二・二十三集〔同右〕

酒田市立光丘文庫所蔵漢籍分類目録

山形県関係新聞記事索引 昭和61年版〔山形県立図書館〕

山形県立図書館郷土資料目録 4

山形県史料所在目録 第6集

佐藤清太文庫目録〔福島県立図書館〕

郷土資料増加目録〔昭和51―60年度〕

〔同右〕

ふくしまの女性たち―プロフィールと参考文献目録〔同右〕

〔福島県〕桑折町歴史資料所在目録

第6・7分冊

〔福島県〕中島村史資料所在目録

〔福島県〕岩代町資料所在目録―中世・近世

福島県山都町史資料目録 第3・5・6集

歴史資料館収蔵資料目録 第16集

〔福島県文化センター〕

〔福島県〕滝根町古文書調査報告 4

筑波大学予約雑誌目録 1987

取手市史資料目録 第八・九集

茨城大学附属図書館郷土史料目録

三・四

茨城県立歴史館 和書目録 三

史料目録 19・21〔同右〕

日立市郷土博物館収蔵資料目録 第

四・六集

栃木県史料所在目録 第15・16集

真岡市史資料所在目録 第一・三・六集

群馬県近世史資料所在目録 29

群馬県行政文書簿冊目録 第3・4集〔群馬県立文書館〕

群馬県立文書館収蔵文書目録 4

〔同右〕

増加図書目録 昭和60年度〔伊勢崎市立図書館〕

伊勢崎市立図書館郷土資料目録 上

巻〔同右〕

伊勢崎駿台文庫図書目録 昭和60年度〔同右〕

岡崎文庫図書目録 昭和61年度〔同右〕

〔群馬県〕黒保根村誌基礎資料 第一号

収蔵文書目録 第22・25集〔埼玉県立文書館〕

埼玉県教育委員会行政文書絵目録 第1集〔同右〕

埼玉県行政文書件名目録 第14・15集〔同右〕

〔埼玉県〕吹上町史資料 古文書目録篇

加須市諸家所蔵文書目録 I・III

平和への願いをこめて 戦時〔平和〕

資料所在調査報告書〔東松山市立図書館〕

潮地悦三郎文庫目録〔埼玉県立浦和図書館〕

松戸市古文書目録 (4)〔松戸市史編さん委員会〕

〔千葉県〕大網白里町史料目録 3

〔千葉県〕山武町古文書目録 V

流山市史資料目録 I上・下

古文書目録 第一・九集・別集1

〔小平市図書館〕

伊勢崎市史資料所在目録 宮郷I・II・名和I・II・三郷II・同別冊・豊受II・北南茂呂I・II・殖蓮II・補遺I

田中啓爾文庫目録 第三卷〔立正大学図書館〕

東京大学経済学部所蔵白木屋文書目録

蔵書目録〔昭和61年度版〕・〔昭和62年度追録版〕〔東京都産業労働会館図書資料室〕

信濃国水内郡戸狩村石田家文書目録

〔国学院大学図書館〕

立正大学古文書学研究叢書 No19・20・22・24〔立正大学古文書研究会〕

島田賢治家所蔵文書目録〔同右〕

東京都立中央図書館洋書目録 芸術・語学・文学編

東京都立中央図書館増加図書目録 1978

東京都立中央図書館蔵書目録 19

79-1983 歴史地理・自然

科学工学・書名索引

芭蕉記念館資料目録 第6集〔江東

区芭蕉記念館〕

国士館大学増加図書目録 昭和60年

版〔索引共〕

昭和57年版 増加図書目録〔佼成図

書館〕

静岡県周知郡春野町所在古文書目録

IV〔国学院大学地方史研究会〕

(以下次号)

彙

報

○史料の収集

今年度は次の六件について、マイクロフィルムによる収集を実施した。越中国島村折橋家文書〔十村役〕・信濃国軽井沢宿亀屋佐藤家文書〔村役人〕・信濃国佐久郡平原村小林家文書〔庄屋〕・肥後国天草木山家文書〔大庄屋〕・伊予国宇和島藩士鈴木家文書および鈴木譲旧蔵書籍などである。

このほか、特別研究「近世史料の古文書学的研究」の一環として但馬国出石仙石家文書〔大名〕のマイクロフィルムによる収集を実施した。各文書の概要については本号「新収史料紹介」を参照されたい。

○史料保存機関事務連絡および調査

本年度標記の件については、次の機関を対象に実施した。

静岡県立図書館・静岡市立中央図書館・

三重県立図書館・三重県立博物館〔二月

一六日・一九日、深川美枝子〕

徳島県立図書館・京都大学文学部博物

館・愛知県公文書館〔三月八日・一二日、

林宏保〕

群馬県立文書館〔三月一八日、深川美

枝子〕

○評議員会の開催

本年三月一八日に国文学研究資料館評議員会が開催され、管理運営の概況、昭和六三年度予算内示、昭和六三年度事業計画などについての議事を協議した。

○運営協議会の開催

本年二月一九日に国文学研究資料館運営協議会が開催され、教官人事、管理運営の概況、昭和六三年度予算内示、昭和六三年度事業計画などについての議事を協議した。

さらに三月二日にも開催され、教官人事、当面の諸問題、その他についての議事を協議した。

○近世史料取扱講習会

昭和六二年度の講習会は、昨年一〇月五日・一〇日大阪会場〔大阪府公文書館〕、同一九日・二三日東京会場〔当館〕で開催された。

○文書館学研修会

昨年一月三〇日・二月四日当館で開催された。

○史料管理学研修会

従来実施してきた近世史料取扱講習会を拡充し、昭和六三年度より、標記の研修会を開催する。期間は、九月前半の二週間〔前期〕と十月後半の二週間〔後期〕の通算四週間となる予定。詳細が決まり次第、研修生の募集を行う。

○定期刊行物の発行

1 「史料館研究紀要」第一九号を刊行

2 「史料館所蔵史料目録」第四六集として「紀伊国伊都郡慈尊院中橋家文書」

第四七集として「相模国大住郡土村

原家文書 その一」を刊行。

3 「史料館叢書」10として「近江国鏡村玉尾家永代帳」〔東京大学出版会〕を

刊行

4 「史料館報」第四七号〔昭和六二年九月〕第四八号〔本号〕六三年三月を

刊行

5 「史料館報」第四七号〔昭和六二年九月〕第四八号〔本号〕六三年三月を

刊行

○館内研究会

第一〇五回〔昭和62・12・25〕

「相模国大住郡土屋村原家文書」の目録編成について 藤村潤一郎

第一〇六回〔昭和63・2・4〕

「紀伊国伊都郡慈尊院文書」の目録編成について 鶴岡実枝子

第一〇七回〔昭和63・2・25〕

奥州仕置と秀吉禁制

福島大学教授 小林清治氏

○人事異動

◇昭和六三年三月三十一日付

退職〔創価大学文学部へ〕

〔第三史料室教授 藤村潤一郎

○閲覧業務停止のお知らせ

書庫内燻蒸、蔵書点検の実施にともない、左記の期間の閲覧を停止する予定ですので、お知らせいたします。

四月二五日〔月〕・五月七日〔土〕

史料館報 第四八号

昭和六三年〔一九八八〕三月三十一日発行

編集・発行

東京都品川区豊町一ノ六ノ一〇

国文学研究資料館内〔千一四二〕

国立史料館

電話〇三〔七八五〕七二二一〔代

印刷所

東京都台東区寿三ノ一四ノ一〇

有限会社 スミダ

電話〇三〔八四二〕七三三三